

『円城寺八巻次第』の引用文献について

大 沢 聖 寛

一 問題の所在

『印度学仏教学研究』通巻九四号に、「秘蔵記の成立年代再考」を発表し、そこで『秘蔵記』の「五種念誦」「解界投花」が『円城寺八巻次第』に引用されているが、「真済」の『高雄口決』に説かれている「四種念誦」「奉請奉還解結等義」の間に相違があるとして、『円城寺八巻次第』広沢流の流祖である「益信」（八二七—九〇六）の著作とすることに一考を要するとした。

このレポートでは『円城寺八巻次第』（以下八巻次第とする）の引用文献を検討することにより、改めて「益信」の著作であるかを考えてみたい。

『八巻次第』については、『仏書解説大辞典』に
金剛界八巻次第 ①金剛頂蓮華部心念誦次第法、円城寺八巻次第
②八巻 ③存 ④益信（天長四—延喜六 827-906）撰 ⑤写本（石山寺）

印度學佛教學研究第四十八巻第二号 平成十二年三月

と説かれ、『秘密事相の研究』には

八 金剛頂經蓮華部心念誦次第尊法 八巻 益信(827-906)これを世に『円城寺八巻次第』と云ふ。これ同師の四巻次第に対して云ふのである。この書は益信が寛平法皇に金剛界法を伝授し奉りたる時、『蓮華部心儀軌』に基き、編著せられたものである。

と説かれ、『密教大辞典』には『金剛界念誦次第』の（五）に金剛頂經蓮華部心念誦次第尊法、八巻、円城寺益信撰。世に円城寺八巻次第といふ。同師の四巻次第に簡別するなり。益信が寛平法皇に金剛界法を伝授し奉る時、蓮華部心儀軌を基として撰せり。写本現流。

と説かれ、同辞典の「益信」の項に、

広沢流の元祖、京都円城寺開山、東寺第七代長者。（中略）著作に金剛頂蓮華部心念誦次第法八巻^④云

と説かれ、上円靈城大僧正は『寛平法皇御作次第集成』の新刊紹介で、

『金剛頂經蓮華部心念誦次第』二巻（法皇二巻次第）は益信の『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』（八巻次第という）に準拠して制作さ

『円城寺八巻次第』の引用文献について（大 沢）

れている。益信の八巻次第は『蓮華部心軌』を本拠としてはいるが、『無量寿軌』『軍荼利軌』『千手軌』等、数種の儀軌の説並びに師説を加えて構成され、さらに『略出経』『金剛頂経義訣』『金剛王軌』『観智軌』等、多数の経軌の本文を引用して注釈している。従つて極めて煩瑣な作法次第となっている^⑤。

と説かれている。これらの解説はすべて、『八巻次第』である『金剛頂経蓮華部心念誦次第法』（以下『次第法』とする）を「益信」の著作としている。その根拠は、『密教大辞典』の「益信」の項目の末括弧内の参考書の資料であり、その参考書は、

東寺長者補任・本朝高僧伝八・元亨釈書四・仁和寺諸院家記・伝灯広録上・諸宗章疏録下^⑥

と記されているが、これらの中『仁和寺諸院家記』が確かな資料であり、この資料の「円城寺」に「大僧正益信」の記があり、

備後国人。品治氏。石清水根本行教和尚舍弟。初従明詮僧都^⑦学法相宗^⑧。後受真言於宗叡僧正^⑨。又随源仁僧都^⑩瀉瓶。

一長者。円城寺别当。東大寺别当。八幡最初檢校。仁和三年正月廿九日為云法阿闍梨^⑪。翌二月日補円城寺别当。同四年三月三十

日任権律師。補二長者。寛平二年十月二日転正律師^⑫。同

十二月廿二日転正。同三年九月以後寺務同（四年）十二月廿九日任権少僧都^⑬。同六年十二月廿九日補東大寺别当。兼二法務^⑭。

同七年十月廿六日任権大僧都^⑮。同八年兼任八幡檢校^⑯。取初也。

二九八

昌泰元年於仁和寺被始行布薩。益信為戒師。観賢為維那。同三年三月二日任僧正。延喜元年十二月十三日辛卯於東寺灌頂院奉授灌頂於寛平法皇。色衆八十人。同六年三月七日入滅。八十。北院御記云。円城寺僧正。弥勒化身。為寛平聖主御師範。一天無双大阿闍梨耶也^⑰。

と示してあるも、著作については一切示していない。

二 引用文献について

そこで『八巻次第』といわれる『次第法』にある「大日経云」、「大教王経云」、「大儀軌云」、「義訣云」等の出典調査をした結果、次のような引用文献が判明した。

大正蔵第三卷

No 159 大乘本生心地観経

大正蔵第一八卷

No 850 攝大毘盧遮那成佛神變加持経入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣

大念誦儀軌供養方便會

No 851 大毘盧遮那経廣大儀軌

No 852 大毘盧舍那成佛神變加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌

No 853 大毘盧遮那成佛神變加持経蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言藏

廣大成就瑜伽

No 865 金剛頂一切如来眞實攝大乘現證大教王経

No 866 金剛頂瑜伽中略出念誦経

No 867 金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経

No 870 略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門

No 871 金剛頂瑜伽略述三十七尊心要

No 873 金剛頂蓮華部心念誦儀軌

No 876 金剛頂經伽修習毘盧遮那三摩地法

No 904 念誦結護法普通諸部

大正藏第十九卷

No 930 無量壽如來觀行供養儀軌

No 954 一字頂輪王念誦儀軌

No 972 佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌

No 973 尊勝佛頂脩瑜伽法軌儀

No 997 守護国界主陀羅尼經

No 1000 成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌

大正藏第二十卷

No 1056 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經

No 1069 十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經

No 1075 七俱胝佛母准提大明陀羅尼經

No 1087 觀自在如意輪菩薩瑜伽法要

No 1127 金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌

No 1132 金剛王菩薩秘密念誦儀軌

No 1146 大虛空藏菩薩念誦法

No 1173 金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品

No 1175 金剛頂經伽文殊師利菩薩供養儀軌

大正藏第二十一

No 1199 金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品

No 1211 甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌

No 1231 大輪金剛修行悉地成就及供養法

『円城寺八卷次第』の引用文献について(大 沢)

No 1255 供養護世八天法

No 1256 十天儀軌

大正藏第三十二卷

No 1665 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論

大正藏第三十九卷

No 1796 大毘盧遮那成佛經疏

No 1798 金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣

弘法大師全集第二輯

秘藏記

また出典不明の引用文献を示すと次のような経軌がある。

秘密義^⑤、月輪經^⑥、金剛寶樓閣經^⑦、胎藏軌^⑧、藏軌^⑨、對受^⑩、青龍寺両

卷本^⑪、山家所傳本^⑫、一字儀軌^⑬、金輪王佛頂略念誦法^⑭、大乘方等^⑮、

である。以上の結果『次第法』は「出大軌」つまり『金剛頂

蓮華部心念誦儀軌』を本拠として多くの「儀軌類」を引用し

ているが、その引用例を示すと「次結金剛眼印」では、「出

大軌」として

魔吒を面目に於て、日月となすと觀ずべし 二手金剛拳にして

各各腰の側に安す 遍空の中の佛を視るに 諸佛皆な隨喜して

所有の香花等 及び供養の具と与う 此の目瞻觀するに因て 垢

を去つて清淨と成る 辟除結界と成る 真言に曰く

唵嚩日囉合三昧致合摩吒^⑯

と『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』の文を引用し、次に『略出經』

に云くとして、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』の文を引用し、次

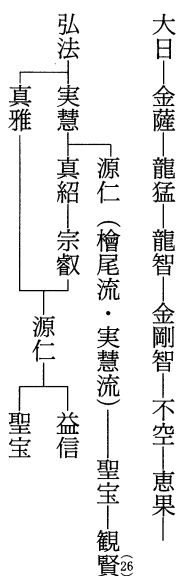
に『義訣』に云くとして、

又眼を以て摩吒の字を置き智慧を明發せしむ。智慧明發するが故に諸佛は讀せられ、故に常に隨順等を得と、中に於て其の加持眞言を解すべし。秘密義とは所謂佛徳金剛三昧の智慧眼なり。此の三昧道智慧門を以て能く智慧をして内外和合せしむ。誰か降伏せざる。誰か隨順せざるが故に悉帝耶等尚隨順を得、悉帝耶とは無情物等なり。共に此の名を秘すが故に顯に説かざるなり。²³

と『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上の文を引用し、その後「或師云」として、

諸佛を視已て、當に壇及び供具を巡瞻すべし。此に依つて五種の勝利を得て、謂所る去垢・清淨・光澤・辟除・結界²⁴_五と説いている。

さてこの「或師云」とは誰れのことであろうか。『次第法』には、「師口云」とか「或傳云」とか「師説云」とか「師云」とか「或師説云」とか「或云」とか「出師説」とか「或師傳」と述べて説を示しているのである。東密相伝各流の図にて示さば、



となり、『仁和寺諸院家記』の「大僧正益信」の項には、後に眞言を宗叡僧正に受く。又源仁僧都に隨つて瀉瓶²⁷。

と示していることからすると、「宗叡」（八〇九—八八四）か「源仁」（八一八—八八七）となる。

三 念誦法の検討

今まで述べてきたことを基本にして、ここで改めて『次第法』の「正念誦」の處で引用された、「念誦法」と『高雄口決』の「念誦法」との対比を通じて検討することとする。

始めに『次第法』では、「念誦經云」として『金剛頂瑜伽中略出念誦經』²⁸の

常に應に毎日四時に念誦すべし。謂く晨朝・日午・黄昏・夜半なり。應に四種の数珠を持し、四種の念誦を作すべし。四種の念誦を作すとは、謂ゆる音聲念誦、二には金剛念誦（口を合せ舌を動して、默誦する是れなり）三には三摩地念誦、心念是れなり。四には眞實念誦にして字義の如く修行する是れなり。此の四種の念誦の力に由るが故に、能く一切の罪障苦厄を滅して、一切の功德を成就す。²⁹

の文章の中、「四種の念誦を作すとは」を『次第法』では「四種の念誦とは」と示して以下引用している。

次に『次第法』では、「秘藏記云」として、

五種念誦とはいわゆる蓮花念誦、音自らの耳に聞ゆなり。金剛念誦、小しく舌端を動す。三摩地念誦、舌を動せず心に於て念誦す。

凡そ心蓮華の上に日輪安んず。月輪の上に明に阿字觀を觀ぜよ。觀と誦と相應して差さず。生念誦、心蓮花の上に商佉を安んず。商佉とは白貝なり。商去より妙音を出づ。譬へば鈴を振るが如きなり。光念誦、口より光明を放つ。持誦のみ。聲を出ださず、これ觀を作すのみ。³⁰⁾

と引用しているが『秘藏記』の本文を示すと、

五種の念誦 いはゆる蓮華念誦、金剛念誦、三摩地念誦、聲生念誦、光明念誦なり。蓮華とは誦する音自らの耳に聞ゆ。金剛とはいはく唇齒を合して少しく舌端を動ず。三摩地とは都て舌を動ぜず、心に於て念誦す。みな、これ心蓮華の上に月輪を敷いて、月輪の上に明了に阿字を觀ぜよ。觀と念誦と相應して差違せず。生とは心蓮華の上に商佉を安んず。〔白貝〕。商佉より妙音聲を出づ。譬へば鈴を振るが如し。光明念誦とは口より光明を出だすと念想して持誦するのみ。それ聲を出だすにも出ださざるにも、常にこの念を作せのみ。³¹⁾

と説かれていて、『秘藏記』の本文と『次第法』に引用された『秘藏記』の文と相違が判明する。しかも『秘藏記』の文を読み直しているのである。つまり『秘藏記』の本文では「五種の念誦」を示した後、それぞれ「五種の念誦」の解説を説いているのに対して、『次第法』では一つにまとめているのである。

このことは大変重要なことで、『次第法』では他の引用文献の「儀軌」は、一部に文の脱落、読み違えはあるものの、「儀

『円城寺八巻次第』の引用文献について（大 沢）

軌」の文そのままである。しかし『秘藏記』の特に「五種の念誦」は読み直しをしているのである。これは引用された『秘藏記』の原文がこのようになっていたことが考えられるのである。このことは『次第法』の引用文献は「二」で示したごとく、多くの「經典儀軌」類であり、その中に同等に『秘藏記』を扱っていることから考えられるのである。

次に『次第法』では

師曰く四種念誦の中、凡夫は金剛語となし、最上とす³²⁾

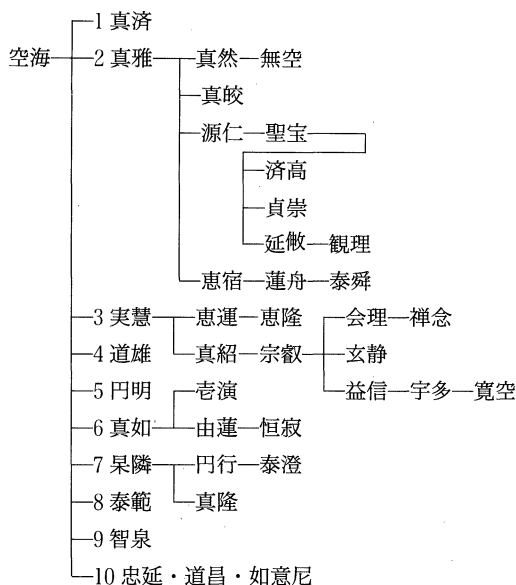
と師の説を示している。「四種念誦」については、弘法大師口説、真濟記の『高雄口決』³³⁾に佛子義剛の條目に依れば「四種念誦義」がある。次にこの本文を掲げると、

念誦法に約するに四種あり、一には三摩地念誦、二には蓮華念誦、三には金剛念誦、四には音聲念誦なり、三摩地念誦と言うは、月輪を自心中に置いて自相自義を順逆に觀するなり。蓮華念誦と言うは、口を動かし音を起して但し自の耳に聞いて他に聞かしめずして念誦するぞ、金剛念誦とは、唇口を動かさずまた音聲を出ださず、舌の端を動かして念誦するなり。音聲念誦とは、音を挙げて長短分明にして自他俱に聞くなり。中に於て蓮華金剛の二念誦を好とす。³⁴⁾

と説かれていて、この相違はすでに拙稿³⁵⁾にて報告してあるが、特に『八巻次第』に『金剛頂瑜伽中略出念誦經』の文を掲げた後、「師曰くとして四種念誦の中で」「金剛語」³⁶⁾（おそらく金

剛念誦」を最上としている。これに対して『高雄口決』の四種念誦では「蓮華金剛」³⁷の二種の念誦、つまり「蓮華念誦」「金剛念誦」を好としているのである。

ここでVI密教系譜の図を示すと次のようになる。



(38)

仁」³⁹となり、「源仁」は「真濟」からみれば、兄弟弟子の弟子であり、「宗叡」は兄弟弟子の孫弟子に当るわけで、「四種念誦」は『高雄口決』に示された「蓮華金剛」とならなければならない。

また『八卷次第』といわれる『次第法』の第四の奥書には、

永萬二年（一一六六）二月九日申剋奉書了、

明和七年（二七七〇）十月廿日未剋令書写⁴⁰ 禪證

とあり、永萬二年以前の伝承は不詳であり、『仏書解説大辞典』の「金剛界八卷次第」の項目には、9写本（石山寺）とあるも、『石山寺の研究一切経篇』⁴⁰には発見出きない。これらのことを総合すると『八卷次第』といわれる『次第法』は、「益信」の著作とするには、再度一考を要する文献と考える。

- 1 『仏書解説大辞典』第三卷・四四六頁・A
- 2 梶尾全集Ⅱ『秘密事相の研究』五四二頁・八
- 3 『密教大辞典』全・六六六頁・中（五）
- 4 『同』二二七九頁
- 5 『高野山時報』第二八三六号、平成十一年新春合併特集号一四三頁
- 6 『密教大辞典』全二二七九頁
- 7 『群書類従』第四輯・補任部・七三五—七三六頁
- 8 『金剛頂経蓮華部心念誦次第法』下・一一一六頁左

この系譜からして、『高雄口決』は大師の十大弟子の中第一番目の真濟（八〇〇—八六〇）であり、『八卷次第』の「師曰」が、前出の『仁和寺諸院家記』から考えれば、「宗叡」か「源

9 『同』五一・一七頁左・五一・一八頁右・五一・一八頁左・五一・一九頁右・五一・二二頁左・五一・二三頁右・五一・二三頁左・五一・二三頁左・五一・二三頁右

10 『同』五一・一九頁左・五一・二〇頁右・五一・二〇頁左・五一・二二頁右

11 『同』五一・二六頁左

12 『同』五一・二三頁左

13 『同』五一・三五頁右

14 『同』七一・七頁右・七一・二七頁左

15 『同』七一・二七頁左

16 『同』八一・一頁左

17 『同』八一・三頁左

18 『同』八一・九頁左

19 大正蔵一八・二九九頁

20 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』上二・一八頁左

21 大正蔵一八・三〇〇頁中

22 大正蔵一八・二二六頁中

23 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』上二・一九頁右

24 大正蔵三九・八一・三頁上

25 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』上二・一九頁右・十頁左

26 『密教大辭典』全・付録四頁

27 『群書類從』第四輯・補任部・七三五頁

28 大正蔵一八・二四八頁上・中

29 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』下八・一二頁右

30 『同』八一・一二頁左

31 弘法大師全集第二輯三八頁

32 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』下八・一二頁左

『円城寺八巻次第』の引用文献について(大沢)

33 『密教大辭典』全一五五〇頁下・『日本大蔵經』第八五巻真言宗事相章疏二・『仏書解説大辭典』第七巻・五一・一八頁A等に『金剛界曼荼羅次第法』の經典名にて表わしている。

34 『弘法大師諸弟子全集』巻中・二四五頁・二四六頁

35 『印度学仏教学研究』通巻第九十四号・六二六頁下

36 『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』下八・一二頁左

37 『弘法大師諸弟子全集』巻中・二四六頁

38 『密教辭典』全・付録一二五頁

39 沙門安然記の『金剛界大法對受記』第八・大正蔵七十五・一九四頁中・下「源仁阿闍梨云。有睿僧正所傳。四種念誦此有二説。一云。聲念誦法。蓮華念誦法。金剛語念誦法。三摩地念誦法。二云。金剛念誦。蓮華念誦。三摩地念誦。真實念誦云云」とあるが、『金剛頂經蓮華部心念誦次第法』下に引用されている『四種念誦』とも相違あり。

40 『石山寺の研究―一切経篇』昭和五十三年三月三十一日、発行所法蔵館。

〈キーワード〉 円城寺八巻次第、益信、高雄口決

(大正大学講師)